金葉和歌集

ノートルダム清心女子大学 古典叢書第一回配本「金葉和歌集」
昭和四十一年十一月十日発行
刊行責任者　シスター・セント・ジョン
翻刻責任者　赤羽淑
発行所　岡山市伊福町二丁目一六の九
ノートルダム清心女子大学 国文学研究室古典叢書刊行会
（振替、岡山・七二三
電話五二―一一五五　内線五七）
印刷所　姫路市南町一八　岸本印刷株式会社

金薤和詩集

巻頭言

ノートルダム清心女子大学が、黒川本を入手してから十七年たった。江戸の国学者、黒川春村、その子真頼、孫真道と、三代にわたって家学を伝えた黒川家の蔵書の中、和歌・物語・歳時の部約千部三千冊がその中に含まれている。これに加うるに、昨年来、前本学教授故正宗敦夫氏の所蔵にかかる金葉集その他の稀覯本が、正宗敦夫文庫の設置とともに大学に移管された。

この度、本学国文研究室の諸氏が、学生の協力を得て、その一部翻刻にあたりこれをノートルダム清心女子大学古典叢書として世に配布する運びとなったことを心から慶び、その努力に深く感謝するとともに、これら叢書が、国文学界に寄与するところを期待するものである。

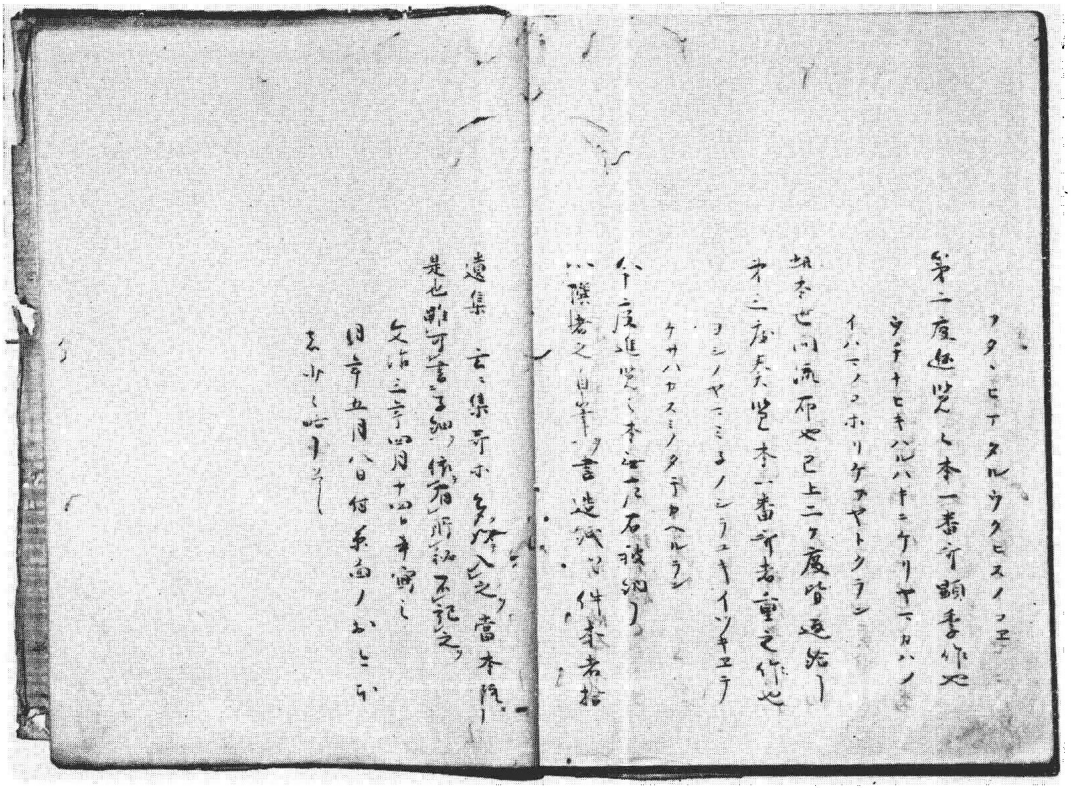
シスター・セント・ジョン

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

金葉和歌集　巻頭

黒川家旧蔵三条本

黒川家旧蔵三奏本
「金葉和歌集」奥書



タタヘヒテタルウクヒスノコエ

第二度御覧之本一番可頭季作也

シテナヒキハハハキニケリヤマカハノ

イハマノコホリケアヤトクラシ

胡本也同流布也已上二ヶ度皆返給し

才三度奏覧本二番可者重之作也

ヨシノヤマミネノシラユキイツキエテ

ケサハカスミノタチヤヘルラン

今度進覧之本一番右兼盛

八雲抄之日本ノ書造歌ト件歌者拾

遺集云々集所ホ多殆入之當本院

是也歟可言之細ノ俤有所詳ト記之

文治三年四月十四日辛酉

日本五月八日付系図ノ如ク

目次

解題……九
凡例……二九
巻第一……三三
巻第二……五〇
巻第三……五九
巻第四……八〇
巻第五……八九
巻第六……九五
巻第七……一〇〇
巻第八……一一二
巻第九……一二七
巻第十……一四七
頭書と他本との異同……一六三
後記……一七九

黒川家旧蔵三奏本「金葉和歌集」解題

金葉集の定本ともいうべき三奏本は、伝本が少なく、平瀬家蔵伝後京極良経筆本系統と吉田幸一氏蔵伝為遠筆本のみが知られていたにすぎないが、それに加えてノートルダム清心女子大学蔵の一本を紹介する。

一、書　誌

本書は黒川真道の旧蔵本であるが、昭和二十四年に本学に移管された。縦二六・五糎、横一九糎の袋綴で、表紙は布目鳥の子、丁子の刷毛染である。題簽は表紙左上、金泥雲霞描の小短冊に冷泉流で「金葉和歌集」とある。見返しには楮紙の貼紙があり、つぎのように記されている。

一　春　五十七首　二　夏　五十首　三　秋　百十一首
四　冬　五十一首　五　賀　廿七首　六　別離　廿五首
七　恋上　六十七首　八　恋下　八十四首　九　雑上　九十八首
十　雑下　四十六首　連哥　十一首
総計六百六十七首　別ニ或本連哥六首
内一首哥上句无

ただし、これは各巻見出しの歌数をまとめたもので実数とはいくらかくいちがっている。

本文用紙は楮斐交漉の薄様で、墨付百五十五丁、一面十行、歌二行書、筆者は記されていないが江戸初期のもので、流暢な冷泉流である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二、系　　統

良経筆本と為遠筆本との相異については、吉田幸一氏「三奏本金葉集の新出本とその意義」（東洋大学紀要第六輯）、ならびに松田武夫氏『金葉集の研究』第六章第三節「三奏本の證本と性質」に委細が尽されている。今、本書をこれら二種の系統と比較すると、為遠筆本にもっとも近く、歌の体裁や配列もほとんど同じである。歌数は、為遠筆本巻末の源俊頼「なゝそちにみるぬるしほの浜ひさし久しき世にもむもれぬる哉」を欠くために一首少ないが、その詞書は書かれているので、筆者の不用意の書落しか、あるいはそこで丁が改まるところから、落丁かとも推定される。同じ冷泉家の書庫から出たらしい両者のうち、筆写年代が古く、筆者も確かな為遠本に、より多くの価値が認められることはもちろんであるが、本書が完全に為遠本に依存しているかというとかならずしもそうでなく、為遠本の不備が補正される場合も少くないのである。

まず、実さいの歌数であるが、吉田氏が調査された三本の異同出入の表（前掲論文一一八ページ）に黒川本の歌数を対比させるとつぎのごとくである。

各巻	見出し記載の歌数	実数 良経本	実数 続類従本	実数 為遠本	黒川本見出し記載の歌数	実数 黒川本
巻第一	春　九十七首	（一丁欠）九〇	九五	九六	春　九十七首	九六
巻第二	夏　五十首	五〇	五一	五〇	夏　五十首	五〇
巻第三	秋　百十一首	一一一	一一一	一一一	秋　百十一首	一一一
巻第四	冬　五十四首	五一	五二	五二	冬　五十一首	五二
巻第五	賀　廿七首	二七	（一丁欠）二二	二七 註1	賀　廿七首	二八

巻第六	別離 廿五首	二五	二五	二五	別離 廿五首	二五
巻第七	恋上 六十七首	六〇	六〇	六〇	恋上 六十七首	六〇
巻第八	恋下 八十四首	八一	八二	八三 註2	恋下 八十四首	八五
巻第九	雑上 九十八首	八九	八九	八九 註3	雑上 九十八首	八九
巻第十	雑下 四十六首	四六	四六	四六	雑下 四十六首	四六
		連歌 一一	一一	或本連歌 七 一一	連哥十一首	一一
		○	○		別ニ或本連歌六首内一首哥上句无	六
計	六五九	六四一	六四四	六五七	六六七	六五九

吉田氏は、表の中につぎの註を加えておられるが、スペースの関係で欄外に出した。

註 1 終に他本による一首の補入あり、これを加へると二八首

註 2 終に他本による二首の補入あり、これを加へると八五首

註 3 但、馬内侍の「ハルサメノ」歌は片仮名で補入これを加へると九〇首

見出し記載の歌数で、為遠本と黒川本のちがう個所は、冬の部で、為遠本は五十四首、黒川本は五十一首となっているが、両方とも実数とは合致しない。歌の実数については、二三の問題は残るが、ここでは本文中にある歌で頭書と区別されるものをすべて数えた。その結果、吉田氏の数え方と巻五、巻八に差が生じた。巻五の最後の歌はつぎのように記されている。

〈前斎院伊勢におはしましけるころいしなとりのいしあはせといふことをせさせ
給けるにいはひの心をよめる　源俊頼朝臣〉

クモリナクトヨサカノホルアサヒニハキミソカソエンヨロツヨマテニ

證本此通り也

詞書は本文と同じ書様であるが、歌が片仮名で一行書である。吉田氏は、「この歌を加へると、この巻の歌数は二十八首となり、巻初の見出しの廿七首より多くなるし、又片仮名で小さく書き入れられてゐることは為遠本の性質上、他本の歌を書入れる場合に用ひた手段であることを考へると、むしろ奏覧本から除かれた歌であると考へ度い。」として、この歌を数えておられない。この記し方はたしかに異質なものの混入を予想させる。「〻」の合点が詞書につく例は、頭書に二例あるのみで本文中には見当らない。吉田氏のいわれるごとく他本の書き入れであろうが、「證本此通り也」と注記してあるので、底本もこうなっていたのであろう。巻八の巻末

恋哥とてよめる　イ本　　春宮大夫公実

あふことはふな人よはてこ(に為)くふねの身をさかのぼる心地こそすれ

恋哥人〻(に為)よみけるによめる(ヨミケル二ヨメル為)　　源俊頼朝臣

あさましやこは何(なに為)ことのさまそとや恋せよとてはむまれさりけり(る為)

の二首はイ本より補入したものであるので吉田氏は数えておられないが、本書では数えた。（吉田氏が前掲論文一二一頁に引用された為遠本の二首を黒川本の右に対校してみたがだいぶ記し方が異なっていることがわかるであろう。）この三首を入れたため吉田氏が数えられたものより二首多くなったが、実際は一首少いのである。なお、表の巻九の為遠本の実数八九の下に吉田氏は、「馬内侍の「ハルサメノ」歌は片仮名で補入これを加へると九〇首」と注記しておられるが、これは何かの間違いではなかろうか。その説明の個所（一二二頁）には

母波ニ・ヲ・ヲ・マノハシタヤヲミナ　赤染
ヲモフコトナクテヤミマシコサノウミノ
アマノハシタヤミヤコナリセハ

馬内侍

はるさめのふるめかしくもつくるかなはやかしはきのもりにし物を」　為遠本
一一一オ

と引用しておられる。この部分一一一オは、良経本・続類従本では、赤染の「ヲモフコトナクテヤミマシ」の一首が馬内侍の歌として「はるさめの」の代りに入っていて、その誤が為遠本や黒川本によって正されることは吉田氏の説かれるごとくである。

為遠本との語句の異同については脚注を見ていただきたいが、為遠本にまま見られる脱落や誤記を補っている個所があるのでそれをあげてみよう。

黒川本番号	為遠本	黒川本
36	みねさくら	みねのさくら
頭49	ツカシケル	ツカハシケル
222	宿鹿	旅宿鹿
375	ねらぬいをそ	ねられぬいほそ
408	わか名をたしの	わが名をゝしの
424	こぬはおしへし	こぬは□□□おしへし
428	しきたへのさくら	しきたへのまくら
頭210	フスハレナカラ	ムスハレナカラ
435	くらふやまさくら	くらふのやまさくら

黒川本番号	為遠本	黒川本
482	まからと	まからむと
495	かたしなりけり	ほたしなりけり
559	をのゝ哥を	をの〳〵哥を
561	まさせてそみる	まかせてそみる
564	くもゐ月を	くもゐの月を
567	なきたちけり	なき名たちけり
572	見らすなるらめ	見えすなるらめ
574	つかはしめる	つかはしける
620	あま河	あまの河

以上のように、為遠本は黒川本によって補われることが明らかになった。それでは黒川本はいかなる本に拠ったかというと、黒川本の本文が為遠本が校合に用いたものと、一致するところが多いので、為遠本のほかに黒川本の祖本となったものが存在していたのではないかと思われる。その個所をあげてみよう。

黒川本番号	為遠本	黒川本
頭4	アマノト	ミナカミ
88	池辺藤花	池辺藤花
207	土御門左大臣	土御門左大臣
210	あり明の月は	あり明の月も
224	ものにて	ものにそ
338	大納言経長	大納言経信
382	さゝかにの	ささなみの

黒川本番号	為遠本	黒川本
405	もりいてたる	ものいひける
468	これより	かれより
485	はし/\と	はし/\ら
494	山のよをふる	山によをふる
631	水のかけとは	人のかけとは

これによって、黒川本は為遠本の直接の転写でないことが明らかであろう。逆に黒川本の不備が為遠本によって補正される個所も少くない。為遠本と続類従本・良経本間における関係については吉田氏の論文にくわしいのでこれを省き、為遠本と黒川本に共通に見られる特長について二三考察してみたい。

まず、合点であるが、二度本に入らぬ歌であることを示す墨点と定家の点であることを示す朱点のほかに六種の合点が付されている。また、玄々・詞花・拾遺・後拾遺・千載・古今・続古今などから入集したものや重複している歌は頭注に記してあり、三奏本から除かれた歌は片仮名で頭書されてあって、とくに初度本との関

係は注目される。巻五までの初度本と重なる歌は、校異の資料として貴重であり、巻六以後の二度本にも見えぬ歌は、為相本の後半を補う新資料を提供するかもしれないのである。

三、合点について

合点は歌の左右の肩に付されているが、その種類はつぎのごとくである。

右肩朱点　〲・＼・＼
右肩墨点　〲・〲・＼
左肩一行目　墨点　／
左肩二行目　墨点　／

の八種類である。この合点のうち、はっきりその性格がわかるのは右肩の朱点「＼」と、左肩二行目の墨点「／」だけである。左肩二行目の合点については、巻第一の頭書冒頭に、「此左墨点者不入第二度本哥也」とあるもので、四首二度本にある以外はほとんど例外なく、初度本か三度本にだけある歌で全部で百三十九をかぞえることができる。為遠本によってこれに十五の合点が補足される。

右肩の朱の合点は、四十五番の俊頼の歌に、「定家点也」とあって、同じものが全巻を通じて十五首みられる。定家の目を留めたものと思われるのであげてみよう。

＼朱
〲朱
やまさくらさきそめしよりひさかたのくもゐに見ゆるたきのしら糸　（四五・俊頼）

＼朱
このもとをすみかとすれはをのつからはな見る人になりぬへきかな　（四九・花山院）

（註、この歌、為遠本では左右に墨点が加わる）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com